鋼橋図面の史料性に関する調査研究部会
報告書-Ⅱ

現存する7鋼橋の図面、計算書の分析

Japan Steel Bridge Engineering Association
TECHNICAL REPORT /No.067-Ⅱ
平成20年5月

鋼橋技術研究会

１．はじめに

１．はじめに

歴史的鋼橋の図面が、他の関連資料と併せて、図面が作成された時期の設計・施工技術、更には設計実務、体制などに関する手がかりを与える役割を持っており、土木史史料としての一般性を持っていることは「図面分析および図面保管に関する調査　NO.067-Ⅰ」述べた通りである。

NO.067-Ⅰまでには、今回対象とした7橋について全体的な分析および横並びの比較を行ったが、本報告書においては、各橋梁一つ一つに着目して図面および設計計算書の内容を鋼橋の専門家の視点から分析することで、図面のもつ史料性を実践的に明らかにすることを目的としている。

今回調査対象とした橋梁は、1928（昭和3）年から1934（昭和9）年の7年間にわたり設計された、十三、尾張、伊勢、美々津、４１Ｄ他、常願寺川、荒川の7橋である。これらは増田淳事務所で設計製図を行った構造物８６件のうち、現橋との対比が可能である現存する主要橋梁である。以下に各橋梁の諸元を示す。

番号	橋　名（所在地）	設計 / 竣工	構　造
1	十三橋（大阪）	1929 / 1931	ﾌﾞﾚｰｽﾄﾞﾘﾌﾞﾀｲﾄﾞｱｰﾁ
2	尾張大橋（愛知）	1930 / 1933	下路ﾗﾝｶﾞｰﾄﾗｽ
3	伊勢大橋（三重）	1930 / 1934	下路ﾗﾝｶﾞｰﾄﾗｽ
4	美々津橋（宮崎）	1932 / 1932	ｽﾊﾟﾝﾄﾞﾚﾙﾌﾞﾚｰｽﾄｱｰﾁ
5	常願寺川水路橋（富山）	1931 / 1931	ﾌﾞﾚｰｽﾄﾘﾌﾞ2ﾋﾝｼﾞｱｰﾁ
6	荒川橋（埼玉）	1928 / 1929	ﾊﾞﾗﾝｽﾄﾞﾌﾞﾚｰｽﾄﾞﾘﾌﾞｱｰﾁ
7	４１Ｄ・４２Ｂ・１０８Ａ（東京）	1927 / 1927	ﾄﾗｽ・ﾄﾗｽ・ｹﾞﾙﾊﾞｰ

また、ここでの分析における主な着目点は以下のとおりである。

- 各調査対象橋梁の建設における背景
- 図面、設計計算書の構成把握
- 図面の表現方法
- 設計時期、設計者、製図者
- 設計計算方法
- 施工管理への関与